

審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	甲 第 129 / 号	氏名	神谷 俊次
審 査 担 当 者		主 査	奥田 康司 (印)
		副主査	長 藤 宏司 (印)
		副主査	野村 文彦 (印)
<p>主論文題目 : Effects of in-hospital exercise on sarcopenia in hepatoma patients who underwent transcatheter arterial chemoembolization.</p> <p>(肝動脈化学塞栓療法を施行された肝癌患者のサルコペニアにおける入院中の運動療法の効果)</p>			

審査結果の要旨（意見）

本研究では、肝細胞癌の TACE 治療時の運動療法が骨格筋量の増加をもたらすことを証明し、予後向上につながることを示唆している。このことは TACE のみならず肝切除、その他領域の癌治療においても適応を広げる価値が有ると考えられる。癌治療時における骨格筋萎縮は、予後に影響する重要な因子であり、これを運動療法により改善させ、治療成績の向上を目指す方向性は、癌治療における新たな方向性として注目すべきものである。学位論文にふさわしい研究と考える。

論文要旨

サルコペニアは肝細胞癌(HCC)患者の予後因子である。肝動脈化学塞栓療法(TACE)を施行した HCC 患者は筋萎縮を起こしやすい。本研究の目的は、入院中の運動療法が TACE 施行後の HCC 患者の骨格筋量に及ぼす影響と筋肥大に関わる要因を検討することである。対象は TACE を施行した HCC 患者 209 名。患者を exercise 群(n=102)と control 群(n=107)に分類した。骨格筋量における運動療法の効果を TACE 前後での骨格筋指数(SMI)の差により評価した。SMI 増加に関わる要因を多変量解析と決定木解析を用いて検討した。ΔSMI は control 群と比較して exercise 群で有意に高値であった(P=0.0029)。多変量解析では運動療法の実施が SMI 増加の独立因子であった。決定木解析でも運動療法実施の有無が SMI 増加に関わる第一分岐因子であった。入院中の運動療法は TACE を施行した HCC 患者のサルコペニアを予防する可能性がある。